

日本語が好きだから



皇宮警察本部 – 皇宮護衛官が日本語検定に初挑戦 –

◆ 皇室を護る我々も正しく美しい日本語を身に付けたい

今年6月に行われた平成25年度第1回の日本語検定には4万人を超える方々が挑戦しました。このうち東京都豊島区の大正大学の一般会場で受検した864人の中には、白の半袖にスラックス姿で参加した皇宮護衛官の方々もいました。皇宮警察本部として日本語検定を団体受検したのは初めてのこと。

庁内での告知や受検者の取りまとめなどを担当した皇宮警察本部教養課の二村宣行皇宮警部補によれば、これまでも英語の資格試験などの取得を推奨しており、「日本語検定の認定を取得した割合は全体平均(認定17.6%、準認定19.7%)と同じぐらい。今後も検定への参加を呼び掛けていきたい」と初参加の手応えを語ってくれました。

初チャレンジで2級の認定証を取得した皇宮護衛官の中から、青木悠希さん、當重恭一さんのお二人に受検の感想や日本語と仕事との関わりなどをうかがいました。

(時事通信社編集委員 升谷 昇)

音楽隊員としても活躍する青木悠希さん。

正しく美しい日本語を身に付けたいと笑顔で話してくれました。



【青木悠希さん】

<皇宮護衛官になった動機や日ごろの仕事>

A. 大学を出て3年目になります。公務員への就職を目指していましたが、ここでしか経験できない仕事があると知って皇宮護衛官になりました。日ごろは赤坂御用地を警備する赤坂護衛署で勤務しています。また、皇宮警察音楽隊ではテナーサクソを担当しています。

<受検の動機>

A. 敬語の使い方に自信がなかったことと、資格試験にチャレンジしたいと思っていた時に、署の掲示板に貼ってある日本語検定のポスターの例題を見て面白そうだと思ったことからです。

<受検の感想>

A. 「難しい」というのが正直な感想です。敬語は普段あまり考えずに使っていたので、改めて文法を理解して答えを出すのに苦労しました。四字熟語は聞いたこともない言葉がたくさんありました。でも辞書を引ながらの(受検)勉強は、新しい語彙の意味を知るなど発見があって楽しいものでした。

<日本語に対する「思い」や受検して気付いたこと>

A. 数多くある日本語のほんの一部しか普段は使っていないと気付きました。日常生活を送るには支障はありませんが、知っていたら絶妙な比喩や美しい表現が日本語にはたくさんあります。もっと勉強していきたいです。

<仕事と日本語の関わり>

A. 天皇陛下はじめ皇族の方々、日本の伝統文化を継承されるために様々な活動をされています。日本語も日本の大切な文化の一つなので、皇室の方々をお護りする皇宮護衛官も正しく美しい日本語を身に付け、使っていく必要があると思います。

<将来の夢や希望>

A. 赤坂御用地の周辺には大使館などがあり、門を警備していて外国人と接する機会も多く、英語の資格試験にも挑戦しています。皇宮護衛官は様々な年代や役職、様々な団体の方々と応接するので、いつでも、誰に対しても失礼のないような日本語を話す力を身に付けたいと思っています。



【とうじゅう 當重 恭一さん】

小学校から大学まで武道一筋のとうじゅう 當重 恭一さん。

礼節を重んじる姿勢が言葉遣いの端々に感じられ、1級へのチャレンジ宣言にも決意がみなぎっていました。

<警察学校や寮生活の様子>

A. 今年4月に皇宮護衛官になったばかりで半年間、警察学校で教養を身に付けるための講義や武道などの訓練を受けています。寮では6時起床で始まる集団生活を送っていますが、小学校から高校までは剣道、大学では居合道をやっていたので、それほど苦にはなりません。

<受検の動機>

A. 敬語や慣用句など意外と知らない表現が多いので、正しい知識を身に付けるために受検しました。教官の方々のやり取りなど、職場でも敬語を使う機会が多いので大変役立つものと考えました。

<受検の感想>

A. 知らなかった表現がたくさんあり、何気なく使っている日本語は非常に奥深いものであることを思い知らされました。同時に自分の知識の未熟さを痛感しました。

<日本語に対する「思い」や受検して気付いたこと>

A. 日ごろ使っている言語だから腕試し程度に受検してみようと考えていましたが、公式問題集を手にとってみると、生半可な意識では歯が立たないことを知りました。試験内容も難しく、正しい日本語の知識をもっと身に付けていかなければならないと考えるようになりました。

<問題集と学校の両立>

A. 申し込みを済ませてから検定まで1カ月ほどしかありませんでした。休日に問題集を買い求め、例えば20分間ぐらいの時間があれば問題集を開いて少しずつ解いていきました。

<皇宮護衛官にとっての日本語>

A. 天皇、皇后両陛下を始めとする皇族方をお護りするのが私たちの使命です。皇室はわが国の歴史や伝統を象徴する存在でもあり、皇宮護衛官もそうした伝統に通じていなければなりません。その基本が正しい日本語を用い、礼儀や節度をわきまえることだと考えています。

<将来の夢や希望>

A. 今回2級を取得しましたが、未熟な点が多々ありますので、今後も皇室守護の任務に役立てるよう、1級にもチャレンジしたいと思っています。